

## 原著&lt;論文&gt;

## 保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連

— 3歳児クラスの観察から —

塚崎 京子\* 無藤 隆\*\*

The Impact of a Kindergarten Teacher's Physical Contact with  
Children on Their Relationships With Each Other: Observation of a Class of Three-Year-Olds

Kyoko Tsukasaki and Takashi Muto

This study investigates the impact of a kindergarten teacher's physical contact on kindergarten children in terms of their development of relationships with others. For one year we observed an experienced kindergarten teacher who vigorously adopts physical contact with her children as a means of caring for them. The kindergarten teacher receptively hugged children who were reluctant to associate with peers because of anxiety from their first entrance into the kindergarten environment. This receptive hug built up trustful relationships between the teacher and the anxious children, enabling them to regard the teacher as a safety base from which to associate actively with peers. It was found that children, through experience and observation, learned the teacher's physical contact as models of a friendly message, and utilized them in the interaction with peers.

**キーワード:** スキンシップ, 3歳児保育, 保育者, 人間関係

physical contact, care for three-year-old children, kindergarten teacher, relationship

## 1. 問題と目的

接触による慰めや安心感を与えてくれる存在にくっつくことは、ハーロウの一連の実験によっても実証されているように、乳幼児期の発達において重要な意味をもつ<sup>1)</sup>。保育園や幼稚園などの集団保育の現場においても、スキンシップの果たす役割は大きい。しかしスキンシップは、状況や相手によって、また力加減などによっても、意味合いが違ってくるという性質上、行為者の込めたメッセージが必ずしも相手に正しく伝わるとは限らないというあいまいさがある。つまり、愛情伝達方法として重要な役割を果たすが<sup>2)</sup>、交わす相手によってはうまく機能

しない場合もあるという問題を抱えている。

さらに、Field<sup>3)</sup>によれば、アメリカでは幼児虐待やセクシャルハラスメントの増加に伴い、多くの学校の教師や幼稚園の保育者たちでさえもが子どもの身体に直接触れることを控える傾向にあるという。日本においても、幼児虐待やセクシャルハラスメントの問題は年々深刻化してきているため、日本の教師や保育者たちも子どもと交わすスキンシップに対して慎重にならざるを得なくなっている。特に子どもと接する機会が少ない環境で育った若い保育者や、身体接触に対して神経質になっている保護者に対応しなくてはならない保育者にとって、スキンシップの問題は重要な課題となるであろう。

金田<sup>4)</sup>は、3歳未満保育の質を捉える研究において保育者と子どもの感情のありようとその交流・伝達にかかわるものとして、また、西

\*お茶の水女子大学 保育学

\*\*白梅学園短期大学 発達心理学・保育学

條・根ヶ山<sup>5)</sup>は、母子が相互的に関与する行為の可能性を検討するために、それぞれ「抱き」に注目しているが、3歳以上の集団保育場面でのスキンシップを取り上げた研究は行われていない。

しかし、3歳児は、いざこざがもっとも多く発生する時期であり<sup>6)</sup>、つかみ合っている子どもの腕をつかんで引き離したり、泣いている子どもを抱くといった、身体接触を伴う保育者の介入も多発する<sup>7)</sup>。4, 5歳児と比較した場合にも、保育者との信頼関係の確立において、スキンシップがより重要な役割を果たす年齢であると考えられる。

3歳児の保育場面における身体接触に注目した観察を行い、その現状を把握すると共に、事例を取り上げて考察を行うことは、スキンシップの実践や有効性を理解する上で意味のあることだと言えるだろう。

そこで、本研究では、スキンシップを積極的に取り入れているベテラン保育者の3歳児保育を約1年間にわたり継続的に観察した記録から次のことを予想する。

保育者のスキンシップには、

1. 信頼関係を支える機能
  2. 愛情伝達方法としての機能
  3. 親和的身体接触のモデルとしての機能
- という3つの機能があると予想し、これに沿った具体的な事例の考察を行うことにする。

## II. 方法

**調査対象：**都内公立幼稚園の3歳児クラスB組、男児6名、女児8名、合計14名の園児と保育歴23年の経験を持つ保育者1名を対象とした。

**調査期間：**2001年4月末～2002年2月末までの間に、週1回から2回の頻度で登園からお昼の時間まで、または降園までの時間を観察した。

**調査方法：**VTR撮影とメモ書きによる観察を行った。園内すべての場所における撮影を許可されていたので、あらかじめ保育者と相談の上決定した観察日に、B組の子どもと保育者のか

わりを中心に、特に身体接触を伴うやり取りが発生しそうな、いざこざの場面や保育者の動きを追いながら撮影を行った。観察されたすべてのデータを文字化して、その中から身体接触の場面をエピソードとして抽出し、さらに身体接触の始まりと終わりが収録されたものや、注目すべきエピソードに関しては、事例として取り上げて考察を行った。保育者との話し合いを通してエピソードに対する意見交換をしたり、子どもの家庭状況や、観察日以外の日に起きた出来事などの情報を提供してもらうことにより、考察する上でより正確な解釈ができるように心がけた。

**分析方法：**合計38回分の観察で収録された1456件の身体接触のエピソードを、観察日、場所、行為者と相手、場面、身体の動き、発話の有無(内容)、場面の補足/行為の展開、意味、時間の9項目に分けて記録し、14人分のデータを個別に分類した。また意味においては、保育者との話し合いにより、観察記録に基づいてコード化した。コード化は、親和的(親近感・思いやり・甘え)、否定的(不安・悲しみ・怒り・拒否・攻撃・抵抗・避難)、偶発的(無意識・興奮・よろけ)、中立的(誘導・呼びかけ・説得・介入・なだめ・補助)、不明(意味不明・その他の不明)、について行った。各項目における信頼性は、筆者があらかじめ項目に当てはまると思われる身体接触を前後30秒ずつ含めたものをそれぞれ20例ずつ用意して、筆者と1名の保育者間で確認した。評定者間の一致率は0.96が得られた。なお分類の不一致は、協議の上で調整をはかった。合計1456件の身体接触の内、保育者と子どもの接触は878件だったが、夏休みを境に前期(観察回数21回)と後期(観察回数17回)に分けて分類し、その変容を分析した。

身体の動きは、1つの行為につき1カウントとし「叩く」行為などで連続して叩き続けたとしても、1つの行為としてカウントした。しかし一旦行動が止まり再び叩き出した時は、新た

な行為としてカウントした。

### III. 結果と考察

保育者と子どもの身体接触は、後期には接触回数と時間が減少していることがわかる（図1）。子どもから保育者への接触は、14人中11人の子どもに減少が見られた。これは、前期は、子どもが不安から保育者に接触する頻度が高いが、後期になると、同じ理由による身体接触が見られるものの、頻度は減り、短い時間の接触で保育者の元を離れていることを意味している。S先生は、前期で子どもたちからの接触を十分に受けとめたためその時間を合計すると長くなるが、その時間があつたからこそ、子どもたちはS先生との信頼関係を築くことができた。その結果、後期では不安や甘えからS先生に触れたとしても、比較的短い時間で落ち着いて、再び遊びへと向かうことができるようになったと考えられる。

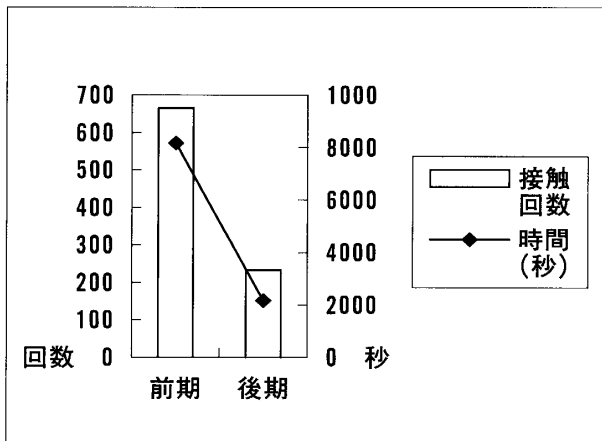


図1 保育者と子どもの身体接触の変容

また、子ども同士の間で発生した身体接触を、受け手の反応によって、親和的・展開なし（無視、自然消滅、ものわかれ）・反発的（抵抗、拒否、いざこざ、第三者の介入）の3つの展開パターンに分類した結果、親和的身体接触が増加していることがわかる（図2）。

この背景としては、子どもの情動調節や意味の共通理解、また仲間関係の成立や言葉の発達などが挙げられるが<sup>7)</sup>、保育者のスキンシップが仲間関係において影響をおよぼしているとも

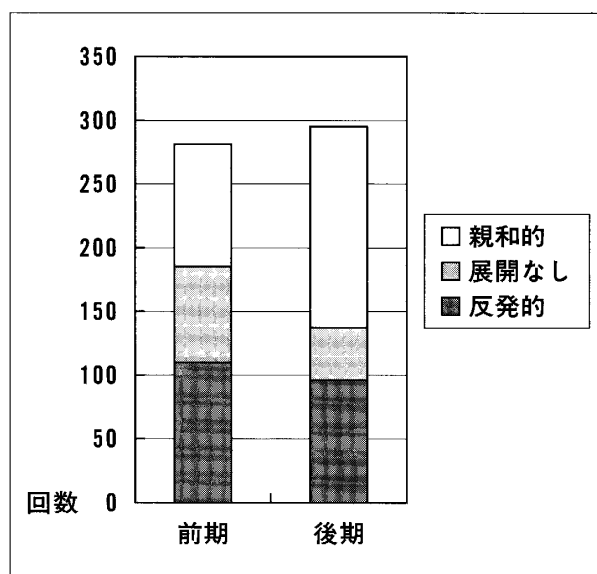


図2 身体接触の展開

考えられる。

以下に、予想した3つの機能に沿って具体的な事例とその考察を述べる。

#### 1. 信頼関係を支える機能

##### 【事例1：「わたし寂しいの」4月24日】

S先生がC男を探しに教室から出る。教室にS先生の姿が見当たらないことに気づいたA子は教室にいたK先生に「先生は？ わたし寂しいの」と言う。A子は教室に戻ってきたS先生と手をつなごうとして手をのばすが、両手がふさがっている。S先生は「ここにつかまって」とズボンのポケットにつかまるようにA子の手を誘導する。A子は言われたとおり、S先生のズボンのポケットにつかまってS先生と一緒に移動する。お帰りの支度の時間に子どもたちは教室の椅子に着席している。S先生がG男の靴を履き替えさせるために、ベランダに出る。A子は一瞬S先生を見失う。A子は「えーん、えーん」と不安な表情で泣き出す。

#### <考察>

A子は、初めての園生活に対する不安と緊張からか、表情も身体の動きも固い。登園時からS先生の側に身体を寄せて「どうするの？」「次はなに？」と聞きながら周りをうかがっているが、その声は訴えるような緊迫したもので、後に観察される友達との会話における潑刺とした表情や声とはまったく異なっている。S先生

は泣いている子どもの対応や朝の支度の指導で追われながらも、A子の質問に答え、A子の身体接触を可能な限り受け入れている。しかし、移動の時や既に子どもを一人抱き上げている時などはA子にポケットにつかまるように誘導している。A子はたとえS先生の身体に直接触れていなくても、その洋服につかまっていることで、S先生との繋がりを感じて安心しているのだろう。

#### 【事例2：「ねえ、ねえ」4月27日】

この時期はまだ、泣きながら登園してきた子どもや、不安な表情の子どもが数人S先生のまわりにいるので、小柄なA子はS先生に話がある時は、大きな声を出して「ねえ、ねえ」とS先生を呼び、手を伸ばしてつかまろうとする。S先生はA子にポケットにつかまるように「A子ちゃん、ほら、ここ、ここ」と繋いだ手をポケットに誘導する。A子は「先生、はやいね」と小走りにS先生について移動する。職員室の前では、「ここで待っててね」と言われてS先生の身体から手を離される。K男やB子も来て職員室の中を見ている。S先生が出てくると、K男、A子、B子が後ろからついて歩く。S先生が水場の方へ行けばそちらに動き、またベランダに戻ればそこについて行く。S先生の動きと一緒に歩いて行って、立って見ている。S先生のまわりに子どもが増えてくると、A子は「ねえ、ねえ」と割り込んでいって先生と手を繋ごうとする。S先生はアスレチックの方へA子と手を繋いで移動する。そこで遊んでいる子どもたちに声をかけたり、子どもがS先生に話しかけに来たりする。しゃがんで前にいる子と話しているS先生の背中に手を置いて、A子はアスレチックで遊んでいる子どもを見上げている。S先生は、アスレチック横の水場から砂場にA子と手を繋いで移動する。その場その場にいる子どもに話しかけたり、園服を脱がせたりする時には一旦A子の手を離す。A子は抵抗もせず、すんなりと手を離して、そのあたりの様子を見ている。S先生は再びアスレチックへ移動する時、自ら後ろにいるA子に手を差し出すと、A子がその手につかまる。

#### <考察>

A子はS先生の側から離れようとしなない。ア

スレチックへ移動するとそこで活発に遊んでいる子どもたちを見つけ、関心を持った様子で見上げるが、S先生が少し身体を動かすと、一緒に動いてS先生の背中から手が離れないようにしている。また、A子自身も移動するがS先生を中心に動き、S先生のどこかには手が触れているようにしている。S先生は、A子と手を繋いで歩くことに慣れてきているからか、砂場からアスレチックに移動する時、ごく自然なしぐさで後方にいるA子に手を差し出している。S先生は、A子の接触を受け入れ、移動する時にも、自分から合図をして、A子が置いて行かれるのではないかと不安に思わないように配慮している。こうした身体接触の経験がA子に「S先生と身体が一旦離れてもまたすぐに繋がる事が出来る」ということを確信させて、気持ちを落ち着かせていくように読み取れる。

#### 【事例3：「どうしようか？」5月1日】

登園後、帽子もカバンも片付けずに遊び出したE子に、S先生が朝の支度を説明するが反応がない。しかしS先生が「お馬さんになってあげるから一緒にお支度しましょう」と呼びかけるとE子は、ぱっと顔を上げてをS先生の背中に抱きつく。S先生はE子をおぶって「ひひーん、ひひひーん」と言いながら小走りに走って教室を出て玄関まで行く。その後ろをA子とK男が走って追いかける。A子は教室に戻って来たS先生の背中に手を乗せるが、帽子をかけて戻ってきたE子に払いのけられて、後ずさる。E子はしゃがんでいるS先生の背中によじ登って首にぶら下がる。S先生は「ちょっと待ってて、E子ちゃん、これ、これ片付けたら行こう」と言うと、E子はすぐにS先生の手を離して移動する。このやり取りを見ていたA子は、E子がいなくなるとすぐにS先生の前に行き、両手でS先生の腕をもって「どうしようか？」と言う。S先生はしゃがんで、A子と向き合い「どうしようか？」と答える。A子とS先生は一緒に笑う。S先生は「うふふふふ、どうしようか？」と言ってA子を抱き寄せて、抱きしめる。A子はS先生の首に手をまわして抱きつく。

#### <考察>

A子は、E子がS先生におぶってもらってよ

ろこんでいるのを後ろからついて行って見ている。S先生におぶってもらうことが何度かあったE子は、S先生に親近感を抱き、S先生を独占したいし、甘えたいのだろう。A子がS先生の背中に手を乗せているのを見て払いのけている。

一旦後ずさったA子だが、E子がいなくなるとすかさずS先生の腕をもって「どうしようか?」と話しかける。何をどうするのかという意味はよくわからないが、S先生も「どうしようか?」と笑いながら首を傾げてA子に話しかけて、二人は一緒に笑い、抱き合う。S先生はA子を抱きしめ、A子の方も全身でS先生にしがみついている。

S先生はE子とのお馬さんを横で見ていたA子の「ちょっと寂しい気持」を察して、A子を抱きしめたように思われる。また、A子も「ちょっと寂しい気持」または独占欲を感じて「S先生に甘えたい気持」の表れとしてS先生にしがみついたと思われる。

#### 【事例4：「おーい、みなさーん」5月8日

登園してきたA子は工作テーブルで折り紙をして遊んでいる。S先生のまわりにはK男やM子やI子がいて話している。そこへ、A子がやってきて、大きな声で「ほら、見て、これボート、こうやるとお魚にもなる」と手に持っている折り紙をS先生に見せる。S先生は「ボート。あー、上手だね、これ」とA子に近寄って見る。A子は折り紙をS先生に手渡し、滑り台（朝から教室に作ってあった）に行き、そこにいたM子に「おはよう、M子ちゃん」とM子の顔を覗き込んで言う。S先生が教室の壁にA子の折り紙を貼りつけようとしている所へ移動して、「ここがいい」と言いながら横で見ているがS先生には触らない。A子は教室でおままごとを始める。園庭の砂場で遊んでいるS先生とB組の子どもたちに向かって、手に持っているお玉を振り上げながら「おーい。おーい。みなさーん」と飛び跳ねながら大きな声で呼びかける。その後も園庭で遊んでいるS先生の側には出てこないで教室でD子やM子と遊んでいる。お茶の時間になると「F子ちゃん、早くきてきて」と笑いながらF子を呼び寄せる。

#### <考察>

A子は、大きな声でS先生に話しかけ、折り紙遊びを一人で楽しめるようになっていく。また、クラスの友達を認識するようになり「おはよう、M子ちゃん」と声をかけられるようになっていく。園の様子に慣れてきたこと、S先生とのスキンシップによって先生との信頼関係が成り立ったこと、友達ができたことによってA子の不安は解消されたと読み取ることができる。

#### 【事例5：「3人で遊べば?」10月3日】

ベランダの靴置き場で一緒に靴を履き替えながら、A子がF子と一緒に遊ぼうと誘うが、F子は違う子と遊びたいと言う。A子は「じゃあ、3人で遊べば?」と言うと、F子は「今日は、\*\*くんと二人で遊びたいの」と言いながら教室に入ってしまう。A子も教室に入るがS先生がいなくてS先生を探すと廊下にはE子が話しかけている。廊下はトライアングルを叩く子がいたり、音楽が大きな音でかかっている、騒々しい。A子はS先生の側に行き、S先生の背中に手を置きながら黙って立っている。

#### <考察>

A子はF子が好きで一緒に遊びたいのだが、F子はA子と遊ぶことに乗り気ではない。A子はF子が遊びたい子と3人で遊べばどうかと提案するが、F子は「今日は\*\*くんと二人だけで遊びたい」と言う。A子は寂しそうな表情をするが、一緒に靴を履き替えていたF子が先に立ちあがってすたすたと行ってしまうので仕方がなく教室に入る。教室に入って見回すがS先生はいない。A子はF子に冷たいことを言われて、寂しくなってS先生の姿を探して、側に行きたのだが、S先生はE子を抱き込むようにして話していること、またその場がとても騒がしいことから、S先生に声をかけることはせずに、S先生の身体の一部に触って呼びかけているように推測される。

この事例のA子のように寂しくなったり、つまらなくなったりした時に、保育者の身体の一部に触って周りを傍観することによって、次の

遊びを考えたり、気持を立て直す様子は、他の子どもの事例においてもいくつか観察されている。保育者の受容的なスキンシップは子どもとの信頼関係を支え、子どもは保育者の身体を安全基地として他の子どもと積極的に関わりをもつようになると考察できる。

## 2. 愛情伝達方法としての機能

### 【事例6：「どこが痛い？」 6月15日】

雨なので、S先生は廊下に飛び箱を出してその上にマットを乗せてお山をつくる。橋を逆さまに置いた船もある。A子とF子は手を繋いで2階に遊びに行ったり教室に戻って来たりして遊んでいる。A子が滑って転んでしまい泣く。S先生は「どこが痛い？」と聞いて膝に乗せて（同じ方向を向く抱き）A子の気が済むまで足をさすってあげる。（90秒間）A子は自分から立ちあがる。そこへF子が来る。F子はA子が座っていたS先生の膝の上に座って、S先生の手を取って自分のお腹に乗せる。S先生はA子と同じ形でF子を抱いて、やはりF子が自分から立ちあがるまで膝に乗せている。（71秒間）

### <考察>

F子は、S先生がA子をかまったように自分のこともかまってくれた。また、S先生の膝に乗るだけではなく、S先生にお腹を押さえて欲しかった。F子とS先生の間には会話は交わされていないので、F子がどのような気持からS先生の膝に乗ったのかは明らかではないが、F子がS先生に抱かれてお腹を触ってもらえたことで満足して自ら立ちあがっていると解釈するならば、S先生とF子のスキンシップには会話以上のメッセージが交換された読み取ることができる。

### 【事例7：「合格」 7月9日】

昼食の準備が行われている。支度の済んだ子どもは教室の真ん中に寄せられたテーブルに着席している。S先生が「どれどれ、お支度できたかな」とB子の後ろに立って、テーブルの上の様子を見る。ゆっくりと移動しながら「あ、A子ちゃん、合格。D子ちゃん、合格。F子ちゃんも合格」と

言ってからS先生の前に座っているF子の頭に手を乗せる。「K男くんも合格」と言ってK男の頭に手を乗せる。「M子ちゃんも合格」と言うが片手に持っていた紙を持ち替えて、M子の頭には手を乗せない。その時、最初のほうで「合格」と言われたD子が「D子ちゃんにこうやらないの?」「D子ちゃんにこうやらないの?」と自分の頭に手を乗せてS先生に呼びかけるがS先生は気がつかない。S先生はC男が支度を済ませていないので誘導している。D子は再び「ねえ、D子ちゃんにはこうやらないの?」と呼びかけるが、S先生がC男の世話をしているのを見て、諦める。

### <考察>

S先生は恐らく無意識に「そこに頭がある」ので手を置いたように観察される。前に座っている子どもや、最初に「合格」と言われたテーブルの角に座っていたD子からは、S先生の行動が良く見えるし、またその行動をじっと見ている。D子は、言葉で言っているように、自分の頭にもS先生の手を置いて欲しかった。「合格」と言われていても、F子やK男のようにS先生に触って欲しかったのだろう。

保育者の子どもへの接触には無意識と思われるものがある。例えば目の前の子どもの肩や頭に手を当てながら、その子どもにだけではなく、周りには子どもたちに声をかけているような場面では、その接触からは特別な意味を読み取ることができないので、無意識の接触と解釈することができる。しかし、たとえ無意識の接触であっても、受け手の子どもがくつろいだ表情を見せる時があり、その様子を周りの子どもがじっと見ている場合がある。子どもは保育者から接触されることで、安心したり、また得意に思ったりしているように観察される。この事例のように、ただ「合格」と言われるよりも、頭に手を乗せられて「合格」と言われた方が、子どもにとってはよりうれしいのではないだろうか。またS先生に頭を触ってもらえなかった子どもは、頭を触られた子どものことがうらやましいと感じるのだろう。S先生はどの子どもにも同じ「合格」という言葉かけをしているが、

「頭を触る」ことがプラスされることによって、S先生の意図とは別に、行為の受け手や、周りの子どもたちからは、何か特別なメッセージを含んでいるように読み取られるようだ。保育者が身体を寄せて来る子どもに、親しみを感じるように、子どもも、保育者からやさしくふれられることを、親密さの表れとして解釈していると言える。

### 3. 親和的身体接触のモデルとしての機能

#### 【事例8：「痛かったね」5月9日】

E子が「だーめ」と言って、K男の顔をフライ返しで3回「ばんばんばん」と叩く。K男は泣き出す。E子は「うしし」と笑っている。S先生は近くにいたので泣き声に気づき、すぐにK男の所へ来るとE子がフライ返しをばたばたさせて笑っている。S先生は「これでぶったら痛いわ」「痛かったね、かわいそうに。どこぶたれたの？ 頭？」とK男に聞く。K男は悲鳴をあげて泣く。K男の頭を撫でてから、しゃがんでK男の腕をもって引き寄せる。K男を抱き上げて、「あーかわいそう」と抱きしめる。S先生は、E子が知らん振りして今度はフライパンを持って滑り台の上にいるので、K男を抱きかかえながら「E子ちゃん、危ないからこれ先生持つてるわ」と言って、E子の手からフライパンを取ろうとするが、E子は逃げる。S先生はK男の背中をトントンしながら「E子ちゃん、かわいそうに、K男くん痛いんだって」とE子に声をかけるがE子は知らん振りして遊んでいる。E子はS先生の前に来る。S先生はE子に「ごめんねした？ ごめんねしたらいいよ」と言う。E子は「ごめんね」「外で遊びたいの」と言って周りを見ている。S先生はK男の足をさすりながらE子に話しかける。K男の顔をふきながら「痛かったね」と言ってK男の頭を撫でる。

#### <考察>

E子は、入園当初から頻繁に身体接触が観察されている。言葉より先に手が出ることが多いためS先生に「お口で言って」と注意されることが多い。この事例でも、面白がってK男をフライ返しで叩いてしまったことは、笑っている表情からもうかがえる。

このE子と先生のやり取りは教室の真ん中で

行われているために室内にいる子どもたちは周りで見ている。S先生がK男を抱きながら「痛かったね」と頭を撫でる姿を子どもたちはじっと見ている。

#### 【事例9：「かわいそうね」9月10日】

ベランダでI子が泣いている。S先生は泣き声を聞きつけてI子のところに来る。ベランダにはままごとセットが出さされていて、泣いているI子の前にはE子が座っている。E子がI子の頭を叩いてI子を泣かせたことがわかる。S先生はI子の後ろに座ってI子の頭を撫でながらE子に「E子ちゃん、E子ちゃん、I子ちゃん、E子ちゃんにぽんと頭ぶたれて泣いてるよ」と話しかけるがE子はしらん振りをしてままごとセットを並べている。ベランダに子どもたちが出てきてそのやり取りを見ている。F子が隣にいる子に「かわいそうね」と言う。S先生はI子の頭を撫で続けてE子に謝るように促す。I子がその状態で泣き続けていると、J男がI子の前に出てきてI子の頭を撫でる。

#### <考察>

2学期になるとB組では、泣いている子どもを見て「かわいそうね」という言葉が出たり、泣いている子どもに近寄って頭を撫でる子どもが出始める。S先生は「3歳児は言葉だけでは伝えきれない」という考えを持っていて、泣いている子どもには、言葉かけと一緒にたっぷりスキンシップを持つ。その姿を4月から見てきている子どもたちが、この時期になって、自分たちから泣いている子どもを思いやるようになり、その気持の現れとして「頭を撫でる」というスキンシップが発生していると考察される。

#### 【事例10：「やめなさい！」10月23日】

G男とH男が剣のことで揉めて、G男がH男を両手で叩くと、H男も叩き返す。何度かやり合った後、G男は近くで見ていたL子の方へ行くが、L子は逃げる。G男を追いかけるH男が「どりゃ」と叩くとG男も叩き返し、叩き合いになる。そこへE子が来て両手を広げてG男とH男の間に入り「やめなさい！」という。G男とH男を引き離してから、H男の両手をつかんで何か話す。G男が

横に来て両手をふさがれているH男を叩き出すが、E子が追い払う。S先生が気付く、G男を呼び寄せる。E子がH男の肩に両手を乗せて話しかけると、H男は泣きながらE子に訴える。E子はH男を抱き寄せて、H男の肩を抱きながらS先生の近くに移動して、G男とS先生のやり取りを見ている。

#### <考察>

2学期になってもE子は、つい手が出てしまって、身体接触によるトラブルをおこすことが多いが、この日は、いざこざの仲裁に入ったり、なだめたりしている。この時期のE子は、誰かを泣かせてしまった子どもを戒めるかのように、叩いて懲らしめたりする姿も観察されている。思いやりや、親和的な感情表現としてのスキンシップが、他の子どもとの間でも見られるようになってきている。

#### IV. 全体的考察

保育者は、入園当初の不安から消極的になっている子どもを、受容的なスキンシップで受けとめることによって、子どもとの信頼関係を築き上げる。その結果、子どもは保育者を安全基地として、他の子どもと積極的に関わられるようになる。保育者が1度に何人もの子どもにスキンシップを求められる場面は、3歳児保育には珍しいことではなく、対応に工夫を要するが、たとえ身体が直接ふれ合っていないなくても、「繋がっている」という実感を持つことができれば子どもは安心する。つまり、保育者と子どものスキンシップは、「両者の身体が直接繋がっている」ということから、「両者の関係が繋がっている」ということを子どもに実感させるという点で、保育場面において重要な役割を果たしていると言える。

また、保育者が慰めたり誉めたりする時に、親和的なスキンシップを伴う行為を保育の中で繰り返していると、子どもは保育者のスキンシップに、親和的な意味合いを感じ取るようになり、保育者と他の子どもとのスキンシップを見

ると、自分にも同じように接して欲しいと思うようになる。さらに、さまざまな場面で保育者とのスキンシップを体験したり、他の子どもと保育者のスキンシップのあり方を見ることによって、そのスキルを学び、仲間関係において模倣しあう。このことから、保育者のスキンシップが親和的身体接触のモデルになっていると言えるだろう。

保育者と子どもは、初めて出会った時から、抱いたり、抱かれたり、手を繋ぐといった親和的なスキンシップを通して親しい関係を成立させる。このことから、たとえ大人と子ども、保育者と園児という関係であっても、その関わりは「からだを持ったもの同士の関係」<sup>8)</sup>であり、同じ場所において表情やからだの所作を共有することが人間関係の基本である<sup>9)</sup>ことから、保育におけるスキンシップは、子どもと保育者、さらに子ども同士の関係を繋ぐ重要な機能を果たしていると言えるのではないだろうか。

**註)** 3学期は子ども同士の身体接触がほとんどで、保育者と子どものエピソードで特に取り上げるべきものがなかった。

#### 参考文献

- (1)ハーロウ, H.F.・浜田寿美男訳『愛のなりたち』ミネルヴァ書房 1977
- (2)倉戸直美「初期経験の重要性」石井哲夫・無藤隆『新・保育士養成講座 第3巻 発達心理学』p. 76 社会福祉法人全国社会福祉協議会 2002
- (3)Field, T. Massage Therapy Effects, American Psychologist, December, pp. 1270-1281, 1998
- (4)金田利子・諏訪きぬ・土方弘子『「保育の質」の研究「保育者—子ども関係」を基軸として』pp. 161-186 ミネルヴァ書房 2000
- (5)西條剛央・根ヶ山光一「母子の『抱き』における母親の抱き方と乳幼児の『抱かれ行動』の発達」小児保健研究会 vol. 60 No. 1



2001

- (6) Green, E. H. Friendships and Quarrels among Preschool Children, *Child Development*, 4, pp. 237-252, 1993
- (7) 塚崎京子 「保育場面における身接触—3歳児における変容—」平成14年度お茶の水女子大学人間文化研究科修士論文 2002
- (8) 無藤隆 『協同するからだとことば—幼児の相

互作用の質的分析』金子書房 1997

- (9) 砂上史子 「あそびとの出会い」無藤隆・倉持清美 『保育実践のフィールド心理学』 p. 132  
北大路書房 2003

#### 付記

観察をさせていただきました幼稚園のS先生と園児の皆さまに心から感謝します。